

## 「閑院宮載仁親王日記」大正九年

梶田明宏  
内藤一成  
白政晶子

## 解説

これまで私たちは大正十年の「載仁親王日記」を翻刻紹介したが、今回は大正九年の日記を取り上げる。同年の日記は独立した日記帳ではなく、大正十年日記帳末尾の「当用日記補遺」欄などに記されるといふ特殊な形態となっている。年表記もなく、解読の結果、大正九年のものと比定した。各日の筆致が揃っていることから、大正十年のある時点で、まとめて書き込んだものと思われる。本日記の記述を大正十年と比較すると、文章は短く、表現も至って簡潔である。日記を転記する際、要約したとみるのが自然であるが、あるいは手帖を筆写したのかもしれない。

なぜ載仁親王が前年の日記を翌年の日記の補遺欄に書き写したのかについても判断としない。親王には元々そうした習慣があったのかもしれない。何か必要があつて書き付けたのかもしれない。現状ではいずれも推測の域を出ないが、今後資料調査が進み、他の年次の日記が出てくれば、疑問を解く鍵が

見つかるかもしれない。

次に本年の内容をみていこう。載仁親王は久しく陸軍大将、軍事参議官の地位にあつたが、前年十二月には元帥府に列せられるという身上に大きな変化があつた。陸軍の元帥には、ほかに山県有朋・奥保鞏・長谷川好道・伏見宮貞愛親王・川村景明がいる。親王は軍人としてはもちろん、皇族としても貞愛親王に次ぐ長老としての役割を期待されていたといつてよい。事実、日記にはそうした役割を反映した記述が多い。

一月から三月にかけては、親王の実姉村雲日栄の病氣と死去に関する記事が目を引く。日栄は安政二年（一八五五）二月十七日、伏見宮邦家親王の第十女として生まれ、近江八幡にある村雲御所瑞龍寺の門跡となった。維新後も還俗せず、明治八年（一八七五）には九条尚忠の猶子として同家に入籍したため皇族ではない。親王は病氣の日栄を直接見舞ったり、度々使者を送るなど深い気遣いをみせている。三月二十二日、日栄は死去したが、実姉であ

っても平民であるため服喪はせず、「心喪」のみという対応となっている。

四月・五月は、皇族の臣籍降下を制度化する「皇族ノ降下ニ関スル施行準則」(以下準則)制定をめぐる皇族会議関係の記事が注目される。準則案では「皇玄孫ノ子孫タル王明治四十年二月十一日勅定ノ皇室典範増補第一条及皇族身位令第二十五条ノ規定ニ依リ情願ヲ為ササルトキハ長子孫ノ系統四世以内ヲ除クノ外勅旨ニ依リ家名ヲ賜ヒ華族ニ列ス」(第一条)とあり、さらに「此ノ準則ハ現在ノ宣下親王ノ子孫現ニ宮号ヲ有スル王ノ子孫竝兄弟及其ノ子孫ニ之ヲ準用ス但シ第一条ニ定メタル世数ハ故邦家親王ノ子ヲ一世トシ実系ニ依リ之ヲ算ス」(附則)とされていた。当時、男子皇族は大正天皇の皇子(裕仁親王・雍仁親王・宣仁親王・崇仁親王)を除けば、すべて邦家親王の系統であり、載仁親王や貞愛親王は一世、久邇宮邦彦王、北白川宮成久王などは二世であった。準則が適用されると、跡継ぎ以外の王はいずれも臣籍降下、さらに長子でさえも五世以降は皇族ではなくなることになる。

準則を議題とする皇族会議は、四月八日に開催を予定していたが、当日それも開会直前、にわか延期された。延期の原因は『倉富勇三郎日記』(以下『倉富日記』)によると、会議の直前に、波多野敬直宮相のもとに、議長をつとめる貞愛親王の「邦彦王殿下が主として反対せられ、博恭王殿下も之に賛成し居る模様にて、或は反対者の方が多数なるやも計られず」との認識がもたらされたためであった。反対論の中心邦彦王の行動は、「載仁親王日記」(以下「日記」)でも確認できる。四月七日条「久邇宮来り、皇族会議(明日)に異見あることを申来る」がそれである。ただし準則関係で王の名が出てくるのはここだけである。邦彦王に関する記述の少なさは、そのまま準則に対する両者のスタンスを表すものといえよう。

延期を受けて、十一日に伏見宮邸に皇族が集まり協議会が開かれた。載仁親王は「伏見邸に集まる。皇族会議の件」と記すのみだが、『倉富日記』には詳細が記されている。それによると協議はまとまらず、博恭王(伏見宮)・邦彦王・博義王(伏見宮)・鳩彦王(朝香宮)は反対論で、稔彦王(東久邇宮)が枢密院にて可決したことを皇族会議にて反対するは不可なりと発言したところ、皇族会議は常に枢密院に盲従するものではないと反発する有り様であった。

延期となった皇族会議は五月十五日に開催されることとなったが、直前になっても反対論が強く、円満に成立する見通しは立たなかった。そうしたところ五月十二日の段階で「正半数にて議決せざるか又は議員各自の利害に関するとの事由にて表決せざるかに決する模様」として、皇族議員の間から「皇族会議令」第九条「皇族会議員ハ自己ノ利害ニ関スル議事ニ付キ表決ノ数ニ加ハルコトヲ得ス」に基づき、表決をしないことを結論とすることで解決をはかるという注目すべき動きがあらわれる。<sup>(3)</sup>このとき事態の解決に向け、中心的に動いた一人が載仁親王であった。

「日記」と『倉富日記』を重ねてみると、本問題の解決における載仁親王の関与の一端がみてとれる。五月十二日、親王は成久王の来訪を受け、「皇族会議の件」で会見した。波多野宮相が成久王より得た情報では「皇族会議の議案は議員全体の利害に関する故、表決せざることに一同申合せ出来たることを告げられ、議事順序の相談あり。北白川宮は山辺知春を従へ、各宮を廻訪して意見を交換し、結局議決せざることに協議せられたる趣なるが、其發議は閑院宮より之を述べられ、北白川宮之を賛成せらるゝ順序なり」(『倉富日記』五月十三日条)というものであった。両者が中心となり、会議を施行

準則の成立に向け各皇族に働きかけを行っていたことがわかる。

もつとも、この「表決せず」という解決策は、宮内省にとっては素直には受け入れにくいものであった。というのも、準則を皇族会議に諮詢した際、「今日の議案は皇族全体に関するることにて、厳格に云へば、自己の利害に關係するものなれども、右の如く解釈して會議出来ざること、なる故、皇族會議令第九条に自己の利害に關係する事項とあるは、直に自己のみのことと解釈し、父子兄弟のことは之に包含せずと解釈して議事を開く」(同前)としたという経緯があり、「表決せず」では、諮詢の前提と矛盾を来たしてしまうのである。結局この問題に関しては、波多野宮相が、載仁親王の提議に対し見解を示さないことで解決がはかられた。

翌十三日、載仁親王は波多野宮相の訪問を受け、「皇族會議(十五日)表決の数に加わらざる件」で協議した。『倉富日記』によると、「波多野、閑院宮に行き、殿下に協議し、殿下より各自の利害に関する議案なる故、採決を憚る旨を提議せらるることに決したりと云ふ」とのことであった。十四日の「日記」には「伏見宮へ行き會議の件」「宮内省南部(光臣・參事官)、浅田(恵一・同前)来り。明日の會議の件」とあり、これは最終的な打合せであろう。

皇族會議当日の様様を議事録<sup>(4)</sup>で確認すると、邦彦王が疑問を述べると、ある程度議論が進んだところで、載仁親王より「御諮詢ノ事項ハ皇室各自ノ利害ニ關係アルカ故ニ自分ニ於テハ意見ノ陳述スルコトヲ御遠慮致シタシ」との発言があり、これに成久王が賛成、さらに波多野宮相が「載仁親王殿下ノ御意見ハ現在ノ皇族全体ノ利害ニ關係スルヲ以テ、皇族會議令第九条ノ精神ヲ斟酌シテ其ノ議決ヲ御遠慮シタシトノ御趣旨ニ伺ヒタリ、若シ多衆ニ依リ右様御決議之レ有ル上ハ宮内大臣トシテハ別段異議ノ申上様之レナシ」と、

事実上黙認の意向を示し、最後に議長の貞愛親王が「載仁親王ノ意見ニ付テハ賛成アリ、其ノ外ニ意見モナキヲ以テ其ノ通決定致スヘシ。右ノ通決定シタルニ付テハ、皇族會議ハ之ニハ表決ノ数ニ加ハルコトヲ得サルモノト議決セリ」と、議決をしないという結論でもって會議の幕引きがはかられた。<sup>(5)</sup>

このほか皇族關係としては、十月二十六日条に「中村宮内大臣来り良子女王の件(シキモー)」とあるのが目を引く。皇太子妃に内定していた良子女王(久邇宮)に色旨の遺伝があることが判明し、皇太子妃辞退の是非をめぐる問題が宮中某重大事件として世間に喧伝されるのはこの年暮れ以降のことであるが、日記は水面下における動きの一端を窺わせる。

六月以降も突然訪日したルーマニア国カロール皇太子の接待關係、十月上旬より中旬にかけての智恵子妃と一緒に日本赤十字社・愛国婦人会の行事出席するための愛知・京都・島根・大阪・山口各府県旅行、さらには十月の秋田県での師団對抗演習統監、十一月の大分県における陸軍特別大演習、同月より十二月にかけての福岡・熊本両県での将官演習旅行といった相次ぐ軍務出張の記事が目を引き。また家庭内の様子、親族との交際など、公務以外の皇族の営みが窺えるのも興味深い。

以上、大正九年日記はごく簡単な記述であるが、内容的には興味深いものが多く、先に紹介した大正十年日記とともに活用されることを期待したい。

#### 〔註〕

- (1) 『書陵部紀要』第六五号(二〇一四年)・同第六六号(二〇一五年)。
- (2) 第一卷、倉富日記研究会編、国書刊行会発行、二〇一〇年。
- (3) この方法は四月八日の會議直前に、倉富が邦彦王ら反対派議員の発言を封

じるべく発案し、会議の参列員である大審院長横田国臣に発言するよう求めたところ、突然の提案には応じられないとして拒絶された経緯がある（『倉富日記』同日条）。

(4) 宮内公文書館所蔵「皇族の降下に関する施行準則正本大正九年」（識別番号26338）。

(5) 永井和「波多野敬直宮内大臣辞職顛末―一九二〇年の皇族会議」（『立命館文学』六二四号、二〇一二年）、宮内庁編『昭和天皇実録』第二（東京書籍、二〇一五年）五八六―五八九頁。

## 載仁親王日記 大正九年

### 【凡例】

一、本史料は神奈川県立小田原高等学校同窓会が所蔵する閑院宮載仁親王の日記のうち、博文館発行の大正十年当用日記帳の補遺欄などに書き込まれた大正九年の日記を翻刻するものである。

一、漢字は原則として常用字体を用いた。

一、原文の仮名は片仮名であるが、大正十年の日記の翻刻と同様、外国人名・地名・外来語等を除き、一般の仮名は平仮名に変えた。

一、句読点・並列点は適宜補った。

一、註は、傍注と各日毎の註を併用した。傍注は（ ）にて表記した。

一、毎日の註が複数ある場合は番号を振った。欄外の書込みは【 】を用いて示した。

一、外国人名・地名など現在の一般的な発音表記と大きく異なる場合は、註記した。

一、大正十年の日記の紹介に際して解説、あるいは註を施した人物・事項に関しては註記を省略した箇所もある。

一、親王が誤って覚え込んでいると思われる漢字は、正しい漢字に置き換えた。

一、右のほか、文中の名辞・表現・評価などにおいては不適切な表現もあるかもしれないが、歴史資料であることを考慮し、すべて原文のままとした。

一月一日 木曜 五時起床、七時雑煮、屠蘇、食事。余始め皆健全なり。九時半より兩人参内、拝賀。智恵子はシンケイ痛の為め帰る。余のみ残る。午後再び参内。

\* 載仁親王と妃智恵子。日記では自身夫婦をこのように記す

一月二日 金曜 余のみ参内。午后東宮御所、皇子御殿、澄宮様へ参る。三条千代子来る。

\* 1 雍仁親王・宣仁親王（高松宮）が居住 \* 2 崇仁親王

一月三日 土曜 元始祭、余のみ賢所へ。帰途原総理、田中陸軍大臣、波多野宮内大臣へ名刺持ち行く。春仁参内。午后春仁、寛子、華子小田原。村雲様昨年十一月より風気、十二月下旬軽き脳溢血のきみ。左手、足の歩行困難。中風のきみ。

\* 1 原敬 \* 2 田中義一 \* 3 波多野敬直 \* 4 村雲日栄（邦家親王第十女子。載仁親王の同母姉。瑞龍寺門跡）

一月四日 日曜 兩人、清棲伯へ行く。陛下へ烟草献上。陛下より蜜柑、芋拝領。安藤子のみ来る。

\*1伯爵清棲家教(載仁親王の同母兄) \*2子爵安藤信昭

一月五日 月曜 新年宴会に出席、智恵子御内宴に行く。三条家へ立寄る。

一月六日 火曜 聯合赤十字会議出席の徳川圀順侯の為め送別会に出席す。

\*1ジユネーブで開催される第一回赤十字社連盟総会 \*2水戸徳川家当主、日本赤十字社

副社長

一月七日 水曜 七草粥。陛下より林檎拝領。寛子、華子帰京。家職夫人四名来る。雨の為め明日の観兵式中止のこと。

一月八日 木曜 兩人、安藤家へ。田台湾総督より品物を貰ふ。

\*田健治郎

一月九日 金曜 東伏見<sup>\*1</sup>二方、病氣全快来る。申置。三条男夫人来る。<sup>\*2</sup>

\*1東伏見宮依仁親王・同妃周子 \*2三条公輝夫人静子

一月十日 土曜 陛下より鴨、蜜柑、野菜。

一月十一日 日曜 英照皇太后御例祭、賢所へ行く。智恵子、東伏見、伏見<sup>\*</sup>

若宮。

\*博恭王

一月十二日 月曜 陛下より長生飴拝領。第七師団長内野中将より林檎を貰

ふ。

\*内野辰次郎

一月十三日 火曜 平和条約発表せらる。詔勅、陸海軍人に勅語、首相の布

告あり。

\*いわゆるベルサイユ条約が発効し、これを期して陸海軍人への勅語が渙発された

一月十四日 水曜 兩人、ポルトガル新公使夫婦に面会。

一月十五日 木曜 仏国へ東久邇宮出発に付き談話に来る。高嶋に入歯を。

智恵子今朝十五日粥を食す。

\*稔彦王

一月十六日 金曜 宮中御陪食、陸軍元帥、大将等に。出席。陛下より野菜。

一月十七日 土曜 新年の為愛国婦人会偕行社に集る。智恵子、寛子、華子

行く。活動写真。

一月十八日 日曜 池田禎政侯並に母堂安喜子流感にて重体、見舞使と菓子。

\*岡山藩主家当主。先代詮政の妻安喜子は久邇宮朝彦親王第三女子

一月十九日 月曜 兩陛下葉山へ。池田侯と母堂死去す。七日の喪に服す。

初野来る。

一月二十一日 水曜 淳宮流感のきみ、春仁今朝来風氣、寒稽古を休む、但

し通学。昨日中島少将夫人来る。

\*雍仁親王(秩父宮)

一月二十二日 木曜 春仁学校休、少々頭痛。女子学習院、十時始まり。松<sup>\*</sup>

井二女、海軍士官と婚姻す。

\*松井修徳(閑院宮事務官)

一月二十三日 金曜 定期の喪終る。東宮、淳宮、高松宮、王世子、三条男

等より見舞、菓子。有栖川宮より料金来る。

\*李垠(朝鮮王族李王垢の嗣子)

一月二十六日 月曜 池田侯、母堂の告別式、福田を遣す。<sup>\*</sup>

\*福田義弥(陸軍騎兵大佐・載仁親王附武官)

一月二十八日 水曜 兩人小田原へ行く。

一月二十九日 木曜 小田原御用邸にある高松宮へ菓子を持せ使を遣す。同

宮も軽き流感なり。

一月三十日 金曜 春仁病氣全快、始めて外出す。

一月三十一日 土曜 寛子、華子小田原へ来る。<sup>\*</sup>斎藤朝鮮総督より烟草、林檎。周山大尉、青森県下へ出張。

<sup>\*</sup>斎藤実

二月一日 日曜 <sup>\*</sup>武宮宮内事務官高松宮の使、過日の御礼に菓子持来る。三重県内務部長外二名、松井に面会、庭内を見せる。野島、綾部両夫人新年に呼ぶ。寛、華帰京。

<sup>\*</sup>武宮雄彦

二月三日 火曜 去る二十一日より休学せしも本日より通学。

二月四日 水曜 小山田、浮田、本日より教授す。

二月五日 木曜 武田さすりや流感にて三日死す。

二月七日 土曜 兩人帰京す。

二月八日 日曜 ガス弱き為火鉢を置く。

二月九日 月曜 <sup>\*</sup>鍋島葉子病氣重しと吉田より夜中電話、<sup>\*</sup>豊島を遣す。

<sup>\*</sup>1 鍋島桂次郎(貴族院議員・元ベルギー駐節公使) 夫人。かつて妃智恵子の御用取扱として奉仕した <sup>\*</sup>2 豊島鉄太郎(閑院宮職員)

二月十日 火曜 葉子午后三時死去すと報あり、<sup>\*</sup>遠藤を使す。

<sup>\*</sup>遠藤忠太郎(閑院宮職員)

二月十一日 水曜 陛下還幸なし、御宴会中止、賢所にのみ余参拝。普選促

進大示威運動、今日も上野、芝に集りたり。

<sup>\*</sup>紀元節宴会

二月十三日 金曜 鍋島葉子告別式に安江を遣す。栄子は子供チブス。金谷<sup>\*</sup>

少将より本年度師団對抗演習の件申来る。東伏見宮、長崎軍艦進水式より持ち帰り菓子色々貰ふ。

<sup>\*</sup>金谷範三(参謀本部第一部長)

二月十五日 日曜 <sup>\*</sup>黒田侯夫人一年祭、福田を代拝す。

<sup>\*</sup>黒田長成夫人清子

二月十六日 月曜 兩人葉山に両陛下の御機嫌伺に行く。御会食。東伏見邸に立寄り、周君様小々風氣、帰京す。本日より寛子九時始まり、華子は十時始まり。

<sup>\*</sup>東伏見宮依仁親王妃周子

二月十八日 水曜 清浦より蚕糸会総会の件。智恵子は三条家の墓所に行くところ起床のとき鼻血と雨天の為止め。村雲様、十二日より再び病氣。

<sup>\*</sup>大日本蚕糸会。載仁親王は総裁、清浦奎吾は会頭を務める

二月十九日 木曜 黒田夫婦来る。料理を出す。

二月二十日 金曜 松井、村雲病氣の為め京都へ。

二月二十一日 土曜 兩人、寛、華子、小田原へ。

二月二十二日 日曜 寛、華帰京。村雲病氣容体悪し。

二月二十三日 月曜 村雲の容体を松井へ問合す。

二月二十四日 火曜 千田勇より鮒十二尾。

二月二十五日 水曜 春仁、本日より流感の兆候、九度二分となる。

二月二十六日 木曜 看護婦二名、村上、岸野を呼ぶ。平井院長を呼ぶ。

二月二十七日 金曜 村雲稍悪くと電報、松井京都へ。余は今夜行にて小

田原より京都へ、千賀を東京へ、余の軍服をとり。山県元帥より春仁見舞として菓物。春仁稍良くなる。

\*山県有朋

二月二十八日 土曜 京都着、村雲様へ面会して、再ひ特急にて帰京（小田原）、雪。

二月二十九日 日曜 春仁漸次良くなる。周山来る。

三月一日 月曜 黒田夫婦より春仁見舞、村雲様漸次衰弱。

三月二日 火曜 村雲様衰弱加わる。

三月五日 金曜 馬場伏見宮別当死す。

\*馬場三郎（内匠頭）

三月六日 土曜 清棲伯京都行、松井も再ひ行く。容体益す悪し、食事下らず。小山田、春仁の病氣見舞に来る。

三月七日 日曜 銚子<sup>\*</sup>伏見宮より魚、智恵子昨日来少々風氣。

\*千葉貞銚子に伏見宮貞愛親王の別邸があった

三月八日 月曜 飛行機二、小田原の天に見る。所沢、京城間の四機の内なり。

三月九日 火曜 春仁二回つ、三十分間起る。

三月十日 水曜 春仁漸次良く、寢床の周囲を廻るも異状なし。三条家より使、春仁見舞。草花五個をとり、<sup>舎</sup>ヨも三条家よりとして送る。周山来る。

三月十一日 木曜 春仁へ東京より取寄の造花、村雲様は昨日稍良。

三月十二日 金曜 高松宮、御帰京に付き菓物を貰ふ。春仁、室内運動。華子今朝より胃腸病学校休。

三月十三日 土曜 御出発に付き平田を御用邸へ。運動の為か春仁体温稍昇る。本日学校卒業式、福田来る。

\*平田輝吉（閑院宮職員）

三月十四日 日曜 華子、明日より学校へ。村雲良からず。春仁、今日より殆んど起る。

三月十五日 月曜 終日雨、夜中雨止み暴風。

三月十七日 水曜 春仁殆んど全快、体力の増加を待つのみ。村雲様重態に付来月の赤愛<sup>\*</sup>の旅行中止。村上、岸野（看護婦）明日下る。

\*日本赤十字社・愛国婦人会

三月十八日 木曜 兩人にて春仁に面会。

三月十九日 金曜 兩人帰京、華子風氣のきみ、28日間小田原。

三月二十一日 日曜 春季皇霊祭、賢所に余参拜、庭の社に兩人。

三月二十二日 月曜 村雲様昨夜午前一時遷化。寛子学校休、華子は風の為休。余は九十日喪、但し村雲様は平民籍なる故、余は心喪のみ、喪章つけず。豊島京都へ。

卒業。

三月二十三日 火曜 中央幼年学校卒業式、御沙汰により臨場。淳宮殿下御卒業。

三月二十五日 木曜 寛子少々風氣、華子通学す。二十七日入棺式、葬儀の日申来る。

三月二十六日 金曜 三条治子、喪中御見舞に来る。

三月二十九日 月曜 北白川宮転任の件人事局長来る。

\*成久王は四月一日付で野砲兵第四聯隊大隊長（大阪）より陸軍士官学校附となる

三月三十日 火曜 年末賞与追給千百〇六円五十銭。

三月三十一日 水曜 寛、華、小田原へ行くところ、寛子風の為中止。陸大臣邸に特命検閲の為会議。

四月二日 金曜 兩人京都へ。東伏見宮も同じ。

四月三日 土曜 村雲棺前に焼香。

四月四日 日曜 善正寺へ行き村雲葬式に参列す。村雲婦人会員多く、代表者あり。約千名。

四月五日 月曜 村雲墓前に焼香、大谷章子食事。

四月六日 火曜 特急にて帰る。

四月七日 水曜 久邇宮来り、皇族会議(明日)に異見あることを申来る。

\* 邦彦王

四月八日 木曜 宮中にて皇族会議(降下ニ関スル施行準則)<sup>\*1</sup>開会前に中止となる。今年度特命検閲の会議。白井第八<sup>\*2</sup>、中島第二師団長を呼び、今年度対抗演習に付き。

抗演習に付き。

\*1「皇族ノ降下ニ関スル施行準則」。一定の基準を設けて皇族を臣籍降下させ、その数を減減するもので、多くの皇族にとって子供やその子孫に影響があることから、制定を巡って

紛糾する \*2白井二郎 \*3中島正武

四月九日 金曜 安藤子来る。

四月十日 土曜 衛戍大射撃会に行。東宮九州より御帰京。

四月十一日 日曜 伏見邸に集まる、皇族会議の件。

四月十二日 月曜 東宮御所に御機嫌伺と御見舞の御礼。伏見宮へ行く。大臣来り伏見宮と面会。奈良中将よりシベリヤ、支那旅行談。

\* 奈良武次

四月十三日 火曜 宮内大臣来り面会。木村三光、三宝院平野来る。

\* 醍醐寺の塔頭。載仁親王は幼少期の一時期、三宝院の門跡を相続していた

四月十四日 水曜 静岡県知事関谷夫人(長田の妹)来る。皇后陛下還啓。

\* 関屋貞三郎の夫人衣(キヌ)は長田忠一(秋壽)の妹

四月十五日 木曜 兩人参内、安藤家へ行。寛、華は黒田家へ。

四月十六日 金曜 上野表慶館内醍醐寺絵画展覧会へ行く。智恵子は篤志婦人会へ、華子買物に、夜中華子突然うづつ(ママ)者を云ふ。稍神経興奮のきみ。

\*1東京帝室博物館内 \*2醍醐寺出陳絵画特別展覧会

四月十七日 土曜 女子学習院卒業式寛子のみ出席。皇族講話会(伏見邸)。

平井来り華子を見る。

四月十八日 日曜 東久邇宮弘国へ出発。

四月十九日 月曜 黒板博士より醍醐寺の宝物を見る。其説明。兩人にて三条治子様へ行く。

\* 黒板勝美(東京帝国大学文学部教授・史料編纂官)。醍醐寺出陳絵画特別展覧会の企画の中心となった

四月二十日 火曜 観桜会、皇后陛下、東宮、兩人出席。賀陽宮大妃、佐紀子と来る。

\* 故邦憲王妃好子

四月二十一日 水曜 寛子、梨本宮へ食事、王世子へ結婚に付き。清浦子来る。弘国より香水二種類六本つゝ、手袋着す。

\* 四月二十八日、王世子李垠と梨本宮守正王第一女子方子女王の結婚式が行われる

四月二十二日 木曜 毛利公来る。宮中顧問、錦鶏へ午餐下賜に出席。伏見若宮妃来る。始めて雷鳴。斎藤朝鮮総督より煙草。吹上御苑へ預たるツツジ九個花咲く。安藤持ち来る。インセク殺虫ざい。

\* 錦鶏間祇候(功劳があつた官吏等の宮中の名譽職)



四月二十三日 金曜 竹田宮<sup>(ママ)</sup>一週年祭。寛子のグリグリ平井に見せる。大演習写真帖。躑躅の世話の為安藤子其他へ金円。

\*故竹田宮恒久王

四月二十四日 土曜 大日本蚕糸会総会第十五回横浜生糸検査所絹糸試験所へ。

四月二十五日 日曜 御沙汰にて目黒競馬倶楽部へ行く。黒田茂子、小供二人と来る。夕食す。市内電車同盟罷業運転せず。

四月二十六日 月曜 賀陽宮恒憲王成年式。

四月二十七日 火曜 女子学習院、浜離宮へ行くところ雨天にて平常のと一り霞ヶ関離宮。恒憲王の宴会、兩人出席。

四月二十八日 水曜 浜離宮へ女子学習院の運動会。賀陽宮三方同所にあり。学習院の後、魚をとる。

四月二十九日 木曜 天皇陛下御名代、余は靖国神社に、又皇后陛下御名代、智恵子参拝。東宮御誕辰参殿立食。毛利みさ子来る。

四月三十日 金曜 寛、華、小石川植物園へ。大曲植木屋へ行く。

五月一日 土曜 新任英大使、メキシコ公使夫婦、チエコスロワツク公使夫婦に面謁、兩人。王世子来る。

五月二日 日曜 天皇陛下還幸、兩人同駅へ。皇后陛下、東宮殿下もあり。

地学協会総会へ行く。

五月四日 火曜 【小田原】兩人小田原行。高松宮江田島へ本日出発。

五月五日 水曜 安藤家節句柏餅。源八ヒマラヤシート十本持来る。

\*ヒマラヤスギ

五月六日 木曜 賀陽宮成年式、餅来る。

五月八日 土曜 寛、華、小田原へ来るところ、暴風雨故中止せしも東京は稍よき為二時五十五分にて来る。

五月九日 日曜 兩人及寛、華帰京。

五月十一日 火曜 春仁午前一時国府津発にて修学旅行。関西地方五年生全部。賀陽宮来り希望を談す。有栖川慰子様来る。春仁、二見朝日館泊。

\*春仁王の日記「関西方面修学旅行日記」が残されている（小田原市立図書館蔵）

五月十二日 水曜 北白川宮来り。皇族会議の件。春仁、奈良魚佐。

五月十三日 木曜 波多野大臣来り。皇族会議（十五日）表決の数に加わらざる件。春仁、吉野芳山館。

五月十四日 金曜 伏見宮へ行き会議の件。佐藤少将より欧洲の話。宮内省南部、浅田来り。明日の会議の件。春仁、京都伏見屋支店。

五月十五日 土曜 皇族会議<sup>\*</sup>。東京支部の親授式。智恵子は教育会の為毛利邸へ行くところ不参、周子様代読。古市男より銀製盆二個。春仁、京都。

\*四月八日に中止された皇族会議の議題「皇族ノ降下ニ関スル施行準則」が再び議された（解説参照）

説参照）

五月十六日 日曜 寛、華、青山四ツ谷方面。宮内大臣挨拶に来り、又「ルーマニヤ」皇太子来朝、接待のこと。春仁、京都出発。

\*この後、ルーマニア皇太子カロール親王が来日する

五月十七日 月曜 茂子来る。春仁今朝国府津着。東京に来る。汽車中睡眠せざる為め疲労、一泊す。

五月十八日 火曜 春仁小田原へ。別当よりルーマニヤ皇太子の件。

五月十九日 水曜 赤十字社にて親授式。千名以上。

五月二十日 木曜 赤十字社總會日比谷。皇后陛下行啓。村雲日浄来る。皇族會議書類を持ち来る。

\* 村雲日栄を襲いだ瑞龍寺門跡

五月二十一日 金曜 本社にて社長以下有功、特別等に面謁。愛国婦人会親授式、偕行社。

五月二十二日 土曜 愛国婦人会總會日比谷、皇后陛下行啓。庭内にて赤字社の為新授章者へ茶菓。華子風氣。

五月二十三日 日曜 愛国新授章者の為庭内にて茶菓。陛下より千鳥拝領。岩手県知事柿沼夫人、智恵子に面会。毛利へ智恵子行く。

五月二十四日 月曜 石原次官来る。ルーマニー。

五月二十五日 火曜 上野聖徳太子千三百年記念美術展覧会へ行。周子様も。

五月二十六日 水曜 士官学校卒業式、御沙汰にて同校へ。終りて参内、復命せり。陛下沼津へ行幸、東京駅へ。賀陽宮卒業にて来る。鍋島夫人、末松夫人来る。藪夫人食事に智恵子呼ぶ。平田を長岡温泉へ。

五月二十七日 木曜 兩人にて新任和蘭公使夫婦、帰国ダヌマルク公使夫婦(デンマーク)に面会。慈恵会行啓、智恵子行、茂子も。平田より長岡の景況を聞く。

五月二十八日 金曜 新任伊国大使夫婦御陪食。余及智恵子出席。皇后陛下、東宮。

\* 1 市村瓚次郎 \* 2 田中国重

五月二十九日 土曜 内催の皇族講話会芝離宮。文学博士市村<sup>\*1</sup>、田中少将<sup>\*2</sup>。

五月三十日 日曜 茂子小供と来る。夕食す。

五月三十一日 月曜 正午芝離宮帝國學士院会々員へ午餐下賜に出席。皇后陛下、東宮横須賀行啓。軍艦陸奥進水式。

六月一日 火曜 岩手県赤愛総会へ出張。智恵子は神経痛にて中止、余のみ。カバンの鍵を忘れ、仙台着後の夜中に来りたり。

\* 赤十字社・愛国婦人会

六月二日 水曜 仙台出発。盛岡着。南部伯別邸泊る。午后親授式。小学生徒旗行列。

六月三日 木曜 赤、篤、愛総会。支部病院開院式。支部へ松を植へ伯邸へも。

\* 篤志看護婦人会

六月四日 金曜 厨川柵址見物。騎兵第三旅団へ行。種馬所へ。物産館、蚕糸品評会、蚕糸会総会、南部鑄物研究所。

六月五日 土曜 青森經由秋田行。ダルマ館。参謀本部の小菅中佐と小藤大尉。

六月六日 日曜 秋田出発。大曲着。現地偵察。池田方昼食。再び現地を見つ、湯沢公園に昇り、一般地形を見る。同駅より汽車帰京。

六月七日 月曜 朝帰京。羅皇太子接伴の御沙汰。春仁去月二十四日頃より風氣、咽に稍重く、看護婦二名、昼夜氷にて冷す。

\* 羅馬尼(ルーマニア)

六月八日 火曜 寛子御茶水の時の展覧会。華子は赤羽近衛工兵隊見学。清棲伯来る。接伴員を呼ぶ。智恵子鍋島、浜尾、吉田、有島に面会。東宮大夫来る。

\* 湯島の東京教育博物館において開催

六月九日 水曜 渡辺大佐講話、独国に付き。参謀本部。

\* 渡辺鏡太郎

六月十日 木曜 智恵子、春仁見舞小田原へ。余は東宮御所食事に。

六月十二日 土曜 兩人、寛、華、小田原へ。春仁稍良。

六月十三日 日曜 兩人、寛子、華子八角堂に昇る。春仁を見舞ふ。寛、華  
帰京。

六月十四日 月曜 柿沼岩手県知事兩人、主事、属官、礼の為め小田原に来  
る。<sup>\*2</sup> 宮田福島県知事より桜桃、内野第七師団長より蕨、江崎の枇杷等を大林  
持ち来る。春仁頸のハレ稍良、少々風気。

\* 1 柿沼竹雄 \* 2 宮田光雄

六月十五日 火曜 春仁今朝来左足の内ガワ骨の周圍痛む。

六月十六日 水曜 兩人帰京。暴風雨の為藤棚下にて下駄水中に没入。春仁  
の紺足袋を履く。自動車遅き為め発車二、三分前に着。故に荷物、食事も。  
遠藤大困り。

六月十七日 木曜 吉田式部官来る。

六月十八日 金曜 南部伯兩人来る。置物を貰ふ。<sup>\*</sup> 宮内大臣交迭す。

\* 波多野敬直より中村雄次郎へ

六月十九日 土曜 参内。皇后陛下昨日還啓。伏見邸に山県元帥より談話。  
村雲尼公の喪あける。

六月二十日 日曜 新旧兩大臣来る。寛、華、安藤家へ。

六月二十一日 月曜 日仏協会第十二回総会。

六月二十二日 火曜 陸軍大臣邸晚餐。<sup>\*1</sup> 一戸大将現役満期の為。秋山、<sup>\*2</sup> 大庭<sup>\*3</sup>  
の第七、第十九師団特命検閲の話。

\* 1 一戸兵衛 \* 2 秋山好古 \* 3 大庭二郎

六月二十三日 水曜 羅皇太子着京。東京駅より東宮殿下と同車、離宮へ行  
く。別当を三十一日晚餐に東宮殿下御招のことを申上る。松井へ五百。

六月二十四日 木曜 議院にて尼港殉難者の祭に参拝す。宮中羅皇の為晚餐  
会に出席。舞楽、太平楽、納曾利。智恵子不参。

六月二十五日 金曜 地久節、余のみ参内。外務大臣晚餐。羅皇、東宮、余  
出席。三絃、手品。故日栄様の御遺物を貰ふ。

六月二十六日 土曜 陸軍大臣後楽園の羅皇の為午餐、出席す。試切、劍術、  
席画。東伏見宮催皇族講話会不参。寛、華、小田原へ。

六月二十七日 日曜 寛、華帰京。

六月二十八日 月曜 沼津へ陛下の御機嫌伺に余のみ行く。途中暴風雨。長  
岡外史汽車中にあり。

六月二十九日 火曜 羅皇箱根より帰京。陸軍大臣より賀陽宮の件。徳川議  
長より初代議員三十年紀念晚餐来月十三日に。

\* 徳川家達（貴族院議長）

六月三十日 水曜 羅皇を招く。東宮も御出席、総理以下三十二名。

七月二日 金曜 平和克復御報告祭、賢所。余のみ出席。

\* この日、宮中三殿および神宮、神武天皇陵、明治天皇陵において、平和克復報告の儀が行  
われた

七月三日 土曜 新浜羅皇鷓鴣。余出席。池に落ち左半身水に浸る。但し異  
状なし。

七月五日 月曜 羅皇宮城内武術御覧、東宮も。午餐、御苑御茶屋。調子乗  
其他、貴族院観覧。学習院半日となる。

\*古式(和式)馬術の技法

七月七日 水曜 羅皇、士官学校へ。随員少将ガバーネス講話、参謀本部。

\*Constantin Gavanescul

七月八日 木曜 伊国新任大使に余面会。

七月九日 金曜 宮中特命検閲報告。

七月十日 土曜 *envoie au médecin quatre mots*!

\*直訳だと「医師に四つの言葉を送る」となる

七月十一日 日曜 兩人小田原へ。夕刻帰る。春仁初めて外出。松井に彼の件を。

七月十二日 月曜 羅皇の招き、霞ヶ関離宮。写真を貰ふ。余のを贈る。

七月十三日 火曜 羅皇の為宮中昼食。代々木練兵場、羅皇より日独戦争の殊勲者へ親授式。

七月十四日 水曜 羅皇退京。

七月十六日 金曜 皇后陛下より接伴御挨拶として拝領物あり。福田を御礼に出す。

七月十七日 土曜 天皇陛下還幸。人事局長来。

七月十九日 月曜 両陛下の御機嫌伺に参内。暑中伺も兼る。

七月二十日 火曜 皇族会議、<sup>\*</sup>芳磨王の件。

\*芳磨王(山階宮)の臣籍降下の件

七月二十一日 水曜 土用人に付き電報。沼津東宮へ。

七月二十二日 木曜 黒田夫婦暑中来る。故日榮様法事松井行く。

七月二十三日 金曜 山階芳磨王降下、賢所へ行く。

七月二十五日 日曜 千賀下る。

七月二十六日 月曜 午餐下賜芝離宮。貴衆両議員。初期以来の議員も全出席。東伏見宮も。

七月二十七日 火曜 両陛下日光へ行幸、上野駅へ行く。南宋展覧会を寛、華、見せる為め精養軒に置き、駅より再び来り、共に見る。羅皇横浜出帆。余に電報羅皇より。戸田長官横浜に行く。余伝言。

七月二十八日 水曜 吉田接伴員より羅皇の談話。

七月二十九日 木曜 赤十字本社。帰朝の徳川<sup>\*1</sup>副社長、蜷川<sup>\*2</sup>の為晚餐。報告あり。

\*1徳川圀順 \*2蜷川新

七月三十日 金曜 明治天皇御例祭、賢所へ。

七月三十一日 土曜 兩人、寛、華、小田原へ。平田長岡温泉へ先発。

八月一日 日曜 人事局加納大佐来り。岡山進級。桜井大尉を後任に申。

八月二日 月曜 長岡温泉へ兩人、春仁、寛子、華子行。<sup>\*</sup>和田豊治別邸に泊る。

\*実業家、富士瓦斯紡績社長

八月五日 木曜 江川の反射炉を見に行。前日暴風雨にて途中出水、葦山江川邸へ行けず。願成就院に宝物。時政の墓。三津より沼津に行き春仁特急に東京行。雷雨長岡に帰る后甚た強し。

八月六日 金曜 春仁南宋展覧会へ。

八月七日 土曜 朝食前裏山に。春仁習志野騎兵学校。船橋海軍無線電信見学。

八月十日 火曜 遠藤、竹内<sup>\*</sup>と交代。春仁学習院退学件。東伏見宮より桃を

貰ふ。礼の手紙平田より。陸軍大異動。周山少佐に桜井副官となる。

\*竹内二郎太(閑院宮職員)

八月十一日 水曜 伊東に行くところ道路悪し為、修善寺と朝日瀧。周山来る。

八月十三日 金曜 葦山の江川邸に行く。先々代の書類。其家は約八百年前の者。三島に三島神社参拝。宮司は一昨年北海道函館神社の宮司なりし。

八月十四日 土曜 春仁着す。福田東京より。黒田夫婦今朝東京より沼津に着し、午后長岡に来る。

八月十五日 日曜 天城山附近の浄蓮瀧に行くところ道路悪き為、佐野瀧。午后稚子淵より舟に乗り、狩野川に鮎獵。

八月十六日 月曜 春仁小田原へ帰。

八月十八日 水曜 静浦の黒田別邸へ兩人。寛、華、地引網。瓜島一週。

八月十九日 木曜 裏山へ松本なる持ち人と昇り、穴の説明。ヒモロと云ふ木。九州方面より暴風雨来と云ふ。

八月二十日 金曜 松本よりフクエと云栗の一種の果を貰ふ。

八月二十一日 土曜 裏山にヒモロの芽生とり。出発準備。

八月二十二日 日曜 長岡発四人小田原帰。福田、周山、桜井来る。

八月二十三日 月曜 大谷伯病氣見舞。

八月二十四日 火曜 池にて魚釣、三十分間にて三十疋余。山県元帥の近況を電話にて。

八月二十五日 水曜 兩人、華子帰京。春仁単独外出の件。

八月二十六日 木曜 稲垣中将より談話。仏国へ出張に付正装の飾帯をたのむ。

\*稲垣三郎(国際聯盟陸軍代表)

八月二十七日 金曜 福田、秋田県へ地理演習の為。

八月二十八日 土曜 兩人日光行。兩陛下の御機嫌伺。上原総長あり。

\*参謀総長上原勇作

八月二十九日 日曜 兩人、華子小田原へ。

八月三十日 月曜 銚子伏見宮より鯛と鮑。伊香保大火。東久邇妃同地にあり。見舞の電報。

\*伊香保温泉で大火が発生したが、稔彦王妃聰子内親王が滞在していた伊香保御料地の建物は類焼を免れた

八月三十一日 火曜 天長節に付電報、日光へ。

九月一日 水曜 二百十日。無事。

九月二日 木曜 春仁にコゴト。

九月三日 金曜 八月三日春仁誕生祝の強飯を食す。竹田宮妃(御用邸)より智恵子の見舞、缶詰を貰ふ。

\*故恒久王妃昌子内親王

九月四日 土曜 兩人、寛、華帰京。千国竹田宮妃へ御礼。赤十字社長更迭す。

\*1千国四郎(閑院宮職員) \*2石黒忠恵から平山成信へ

九月六日 月曜 寛、華本日より通学。春仁も同し。金谷少将、服部大佐演習地に付。金谷の尼港話。平山新社長来る。

\*服部真彦

九月七日 火曜 亀岡を呼び、余の写真偕行社へ。

九月八日 水曜 森岡中將騎兵会へ臨場の件。<sup>\*1</sup> 新東宮武官長奈良中将来る。<sup>\*2</sup>  
石黒前社長来。

\*1 森岡守成 \*2 奈良武次(七月十六日付にて東宮武官長拜命)

九月十日 金曜 東宮御所にサガレン州の活動写真召されて見に行く。

\*北樺太

九月十二日 日曜 仏国へ注文の兩人手袋着。五ヶ月。仏国より小包にて。  
鈴木第五師団長上京。

\*鈴木莊六

九月十三日 月曜 騎兵会、富士見軒。全国の旅団長、聯隊長陸軍省へ集合。  
故に皆な集る。昨日北海道沖榛名軍艦砲塔破裂、浜田大尉死す。見舞をやる。

九月十四日 火曜 黒田夫婦を招き夕食。一羽白鷺庭の木に。

\*ハルビンに設立の日露協会学校

九月十六日 木曜 兩陛下日光より還幸。上野駅に兩人。稲垣中將を呼び、  
仏国にて注文品件。澄宮様より御土産品。

九月十七日 金曜 兩人参内。篤志婦人会例会、智恵子出席。小犬二疋来る。  
九月十八日 土曜 兩人、寛、華、小田原行。太田黒少将へ余の写真。陛下  
へ煙草。

\*太田黒龍亮

九月十九日 日曜 寛、華帰京。春仁体量百二十匁。

九月二十二日 水曜 兩人小田原より帰京。【五日間小田原】

九月二十三日 木曜 秋季皇靈祭。余のみ賢所。庭の社に拝す。

九月二十四日 金曜 赤十字社にて地方官の為晚餐会出席す。日露協会に於

て校旗授与式。

九月二十五日 土曜 山階宮催皇族講話会。芝離宮。智恵子出席。

九月二十六日 日曜 磯谷事務官、小原男来り、賀陽宮の件。

\*磯谷熊之助(宮内事務官)

九月二十七日 月曜 東宮御所午餐に召さる。

九月二十八日 火曜 恭子来り夕食して帰。

九月二十九日 水曜 師団対抗演習の件上奏。愛国新会長始め智恵子に面会。  
新旧赤十字社長以下の為晚餐。電灯数回消。

\*下田歌子。智恵子は愛国婦人会総裁

九月三十日 木曜 対抗演習の為晚餐、総長以下へ。夜中暴風雨。

十月一日 金曜 国勢調査あり。暴風雨の為め不通。<sup>\*1</sup> 榊原中將より昭憲皇太  
后の太字に付き。<sup>\*2</sup>

\*1 榊原昇造(予備役) \*2 この頃、明治天皇の皇后の追号「昭憲皇太后」について、「皇后」  
ではなく「皇太后」とするのは不適切との議論が起こった

十月二日 土曜 小田原の電話今朝通ず。大なる損害なし。長岡の入費三千  
百二十円三十二銭。内二百九十九円手本。

十月三日 日曜 天竜川の鮎拝領。

十月四日 月曜 特急にて兩人出發、名古屋ホテル泊。

十月五日 火曜 【愛知】愛知支部、赤、愛総会公園、親授式県庁。三万人  
以上。

十月六日 水曜 名古屋出發、京都泊。末松子死去のこと知る。<sup>\*</sup>

\*末松謙澄

十月七日 木曜 京都発、松江着。赤木館。

十月八日 金曜 【島根】島根総会、親授式、赤愛総会。歩兵第六十二聯隊へ行。湖上土地歌、舟灯火、花火。

十月九日 土曜 松江発、京都着。往復百八十以上トシネル。

十月十日 日曜 桃山、<sup>\*1</sup>泉山参拝。其他へ行。

<sup>\*1</sup>明治天皇陵・昭憲皇太后陵がある <sup>\*2</sup>泉涌寺敷地内に孝明天皇以下の諸陵がある

十月十一日 月曜 【大阪】京都発、大阪着。中島公会堂親授式。

十月十二日 火曜 天王寺公園赤愛総会。大阪ホテル晚餐会。

十月十三日 水曜 大阪発、山口着。毛利公別邸。

十月十四日 木曜 【山口】親授式、赤愛総会。教育展覧会。宴会。手植、松。

十月十五日 金曜 支部病院、聯隊、神社、諸学校、昼食知事官邸。三田尻

毛利公邸晚餐。終りて特急帰京。

十月十六日 土曜 帰京。

十月十七日 日曜 神嘗祭、賢所へ余。

十月十八日 月曜 【秋田県下出張】上原来る。愛知県知事夫婦来。午后八時発、

秋田県下の対抗演習統監として出張。福田、桜井、竹内。

十月十九日 火曜 横手着。中学校にて訓示。平原旅館。

十月二十日 水曜 真人山に行、昼食。松茸、林檎林。侍従武官大内、東宮

武官来着。今夕より演習始まる。智恵子三重愛国総会の為出張。

十月二十一日 木曜 演習統監。大曲池田家附近大曲クラブ泊。終日雨。

【智恵子の三重出張】山田にて内宮、外宮参拝。二見見物。

十月二十二日 金曜 演習統監。在郷軍人佐藤中尉、金沢柵事蹟講話。湯沢

統監部。余は隣の女学校。

津にて総会終り名古屋泊。

十月二十三日 土曜 湯沢公園にて統監。演習終りて戦線一部巡視、講評、宴会。三時過発、帰京。智恵子も帰京。

十月二十四日 日曜 上野着帰京。

十月二十五日 月曜 参内。東宮御所へも。明治神宮建築拝観、余のみ。

十月二十六日 火曜 寛、華、生徒と所沢飛行隊見学。田中大臣を呼、<sup>\*1</sup>賀陽

宮の件。中村宮内大臣来り良子女王の件（シキモ）。

<sup>\*1</sup>田中義一 <sup>\*2</sup>いわゆる宮中某重大事件

十月二十七日 水曜 伏見宮へ行き相談。田内より大臣へ書面返す。

<sup>\*1</sup>田内三吉（閑院宮別当）

十月二十八日 木曜 司法官午餐下賜出席。

十月二十九日 金曜 所沢航空学校卒業式御沙汰出席す。午后復命。

十月三十日 土曜 島根県知事夫婦、池松大阪知事来る。

十月三十一日 日曜 天長節観兵式皇太子御名代参列す。正午御内宴。両陛

下、東宮以下。寛子、華子、青山参道附近学校式あり。

十一月一日 月曜 明治神宮鎮座祭。市中大に賑ふ。

十一月二日 火曜 皇太子御名代として御参拝。余参列す。兩人、寛、華、

小田原行。小田原駅は去月二十二日より開通す。

<sup>\*1</sup>熱海線国府津・小田原間が開通

十一月三日 水曜 皆帰京。春仁駅迄来り、乗馬にて帰。

十一月四日 木曜 シュイス公使に余面会。山口県知事中山望夫婦来る。参

内して大演習を申。

十一月六日 土曜 【特別大演習出張】特急にて出張。梨本宮も国府津より。  
長谷川、川村両元帥あり。

\*1長谷川好道 \*2川村景明

十一月七日 日曜 大分県中津着（山口方、朝香宮）。金谷少将より両司令官の決心。地形偵察に行。東宮殿下を同駅に向え、后ち封戸村水之江文次郎方泊る（約六里）。村民提灯行列。

十一月八日 月曜 駅館川附近偵察。女子蚕業学校へ行。森二等獣医（失明）に面会。中津西方東吉富高地に行。往復約十三里。

十一月九日 火曜 下池長高地。雨。知事来る。

十一月十日 水曜 駅館川附近大田原高地。午前中にて大演習終る。東宮殿下勅語御代読。講評。総長食事断る。

十一月十一日 木曜 閱兵式、賜餐（宇佐神社内）。神社に参拝。宇佐駅発、帰京につく。

十一月十二日 金曜 特急帰京。少々風気。

十一月十三日 土曜 参内。女子学習院記念日行啓。寛、華、出席。春仁帰京。

十一月十四日 日曜 横浜中学校柔道大会、春仁臨場。横浜より小田原へ帰る。寛、華、黒田家へ。

十一月十五日 月曜 皇后陛下明治神宮御参拝。智恵子不参。安藤家、黒田家、七五三祝。

十一月十六日 火曜 茂子小供二人と礼に来る。

十一月十七日 水曜 久邇宮より台湾御土産。台湾軍司令官柴大将より、又由比青島軍司令官より各品物を貰ふ。

\*1柴五郎 \*2由比光衛  
十一月十八日 木曜 田台湾総督より特産貰ふ。

十一月十九日 金曜 庭内紅葉よし。愛国新旧会長交代に付晚餐。時計其他の品を贈る。小原より柿。戸田より鴨。松井へ五百円（チ）。

十一月二十日 土曜 観菊会小雨の為中止。東宮昨日御還り、参殿す。小田原建築費として手本より。

十一月二十一日 日曜 恭子小供二人と祝の礼に。

十一月二十二日 月曜 陸軍大学校卒業式、東宮御名代参列す。参謀本部午餐に出席。徳川侯邸大風琴を聞に行く。

\*侯爵徳川頼貞邸内南葵楽堂にあったパイプオルガン

十一月二十三日 火曜 新嘗祭賢所に参列。出御なき為め参拝のみ。

十一月二十四日 水曜 平山社長来り色々談話。對抗演習幕僚へ晚餐。写真を贈る。

十一月二十五日 木曜 赤十字東京支部晚餐会、紅葉館出席。

十一月二十六日 金曜 砲工学校卒業式御沙汰出場。皇族附武官より下賜品伝達となる。復命す。安藤夫婦、黒田夫婦を呼び食事。

十一月二十七日 土曜 正午第十四師団長其他へ午餐下賜、出席。久邇宮催皇族懇話会不参。

十一月二十八日 日曜 女中赤坂御菊拝観に行く。

十一月二十九日 月曜 【九州将官旅行演習】特急にて九州に於ける将官旅行演習実視に行く。

十一月三十日 火曜 福岡着。黒田別邸に泊る。



十二月一日 水曜 市公会堂にて演習開始。終日。中野昇（前年宿の息子）。  
十二月二日 木曜 講堂午前。午後福岡東北方新長者原高地（大正五年御野立場）現地演習。小雨。西公園へ行。

十二月三日 金曜 午前公会堂。午後久留米野口波四郎方泊。

十二月四日 土曜 午前偕行社。午後高良台、筑後川右岸偵察。つちや足袋工場。

十二月五日 日曜 偕行社終日。帰途水天宮、篠山公園、豆腐蒲鉾作りかた原料。福田大佐父来る。

十二月六日 月曜 高良台現地問答。稍寒し。午後講堂。主人等と写真。久邇宮本日帰京。

十二月七日 火曜 雨天にて現地なく、直に熊本研屋支店。上原総長着。梨本宮同行す。

十二月八日 水曜 歩兵第二十三聯隊へ行く。幼年学校。大麻の剣術。師団司令部へ行き、旅団長より十年戦の講話。午後熊本北方約四里岩野山、現地問答。東京大雪新聞にて知る。

\*西南戦争

十二月九日 木曜 終日講堂。水前寺見物。内山武官長急に帰る（陛下少々御風気とて）。江口少将（前年近衛司令部へ勤務の者）。

\*江口昌条か

十二月十日 金曜 講評、総評。余、梨本宮。午後一時熊本発、帰京につく。  
佐柳市長夫人来り、根本通明先生の持ちし鉄扇、記念として余に。午後七時十分、特急下関発。

\*1佐柳藤太（熊本市長） \*2漢学者

十二月十一日 土曜 帰京す。春仁は東京に来るに付、国府津より同車。  
十二月十二日 日曜 春仁交換の馬を見る。午後小田原へ帰る。光格天皇御例祭不参す。

十二月十三日 月曜 参内す。両陛下とも数日前より御風気。

十二月十四日 火曜 第十四回の日露協会総会。写真。酒井伯より数回招きもあるも、久邇宮と互に差支の為、今年は中止。

\*酒井忠正

十二月十五日 水曜 御神楽不参。隣地約千五百坪を貰ふ。

\*小田原別邸のことであろう

十二月十六日 木曜 活動写真予習（参謀本部測量部の者）。

十二月十七日 金曜 師団対抗演習のとき湯沢写真師より清酒。

十二月十八日 土曜 新任支那公使に余面会す。東伏見宮の招により余、寛華、行く。食事後活動写真あり。松井へ建築の為五百円。又例の五百円ます。其他へ五十円。

\*胡惟徳

十二月十九日 日曜 余始めの誕生日。正午食事。三条治子始め招き、活動写真。春仁丸木にて写真。夕刻小田原へ。

\*丸木利陽の写真館

十二月二十日 月曜 騎兵第一聯隊軍旗祭、福田を遣し金円を送る。

十二月二十一日 火曜 立花大将より関東の話。人事局長より大谷大将以下の異動の件。中村宮内大臣より東宮御洋行の件。

\*1立花小一郎（前関東軍司令官） \*2大谷喜久蔵（予備役編入）

十二月二十三日 木曜 両陛下下葉山へ行幸。東京駅に行。

十二月二十四日 金曜 【小田原行】兩人、寛、華子小田原行、女子学習院休学となる。春仁も今日より。建築大に進む。

十二月二十六日 日曜 遠雷の如き音を北方に聞く。夕刊にて浅間山の噴火なり。夜中南西風強。

十二月二十七日 月曜 春仁東京に行き、騎兵第一聯隊、近衛砲兵聯隊を見学して夕刻帰る。数回地震あり。二回稍強。小供大に怖る。

十二月二十八日 火曜 兩人と華、帰京。特別資金四十万円の内三万円建築と常費に引出、三万七千円定期預金。

十二月三十日 木曜 新任賀陽宮恒憲王少尉来る。前赤十字社長石黒<sup>\*</sup>を呼び、銀製紋付花瓶を贈る。又同時に余の書を贈るところ出来ざる為め、後日に。

<sup>\*</sup>石黒忠憲

十二月三十一日 金曜 小田原より春仁、寛子帰京。

〔付記〕 本稿の作成にあたっては、「載仁親王日記」を所蔵する神奈川県立小田原高等学校同窓会、並びに「閑院宮関係資料」を所蔵する小田原市立図書館にお世話になった。記して御礼申し上げる。